宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

「ミシェル・ポルナレフ公式がシェアしてコメントした!」ーどのようにして地方国立大学においてフランス語教育を推進するかー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, まさ志, Simizu, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5823

宮崎大学教育文化学部紀要　人文科学　第33・34号（2016）33-46頁

「ミシェル・ポルナレフ公式がシェアしてコメントした！」
－どのようにして地方国立大学においてフランス語教育を推進するか－

清水　まさ志

« Michel Polnareff Officiel a partagé, et a estimé nos vidéos ! »
-Comment promouvoir l'enseignement du français dans une université nationale de province au Japon ?-

Masashi SIMIZU

1 .はじめに

グローバル人材の育成のため、大学において英語の実践的教育が重視されるなか、第二外国語はカリキュラム上でますます存在感を失いつつある[1]。さらに今後、全国の国立大学法人を「三つの枠組み」に分類してそれぞれの大学に特色ある研究と教育が求められるとき、地方の小中規模な国立大学においては、教養科目としてのフランス語の必要性はますます低下していくだろう。どうしたらフランス語教育を通じてグローバル化と地域の活性化を実現できるのだろうか。姉妹都市や大学間協定、あるいは留学といった時間とコストのかかる方策ばかりではなく、現代社会の特色にあった方策をまず考える必要があるのではないだろうか。本稿は、平成26年度において、富山大学芸術文化学部のフランス語を履修する学生と、富山大学公開講座フランス語を受講する地域市民で共同開催した、「ミシェル・ポルナレフ『シェリーに口づけ』動画コンクール」の企画を考察することで、地方におけるフランス語学習の可能性を考えるものである。

2．国立大学改革とフランス語教育

国立大学改革が推し進められるなか、平成28年度から全国の国立大学は「三つの枠組み」に分類される。三つのタイプのいずれを選択したかに従い、国立大学におけるフランス語教育もまた変化させていかざるを得ないだろう。それぞれのタイプにあったフランス語教育を考えていかない限り、特に教養科目としてのフランス語は次第に大学のカリキュラムから消えていくのではないだろうか。「世界水準」型や「特定分野」型を選んだ大学においては、フランス語教育もまたグローバルな視点から実践的かつ高度な運用能力を学生に習得させることが求められるであろう。そしてこれらのタイプの大学では、専門性と実用性を優先的に打ち出すことでフランス語も生き延びられる可能性は高い。

しかし「地域貢献」型を選んだ地方の小中規模な国立大学の場合、フランス語教育が地域の

活性化に役に立つとはなかなか言い切れないだろう。フランス語圏の大学と大学間協定を結ぶ、語学研修や留学を推進するなど、フランス語圏と地域を結び、地域発展と国際化をうたう方法はいわば正攻法といえるが、時間と労力とコストがかかりすぎ、どの大学でも可能というわけにはいかない。例えば､平成26年度まで非常勤講師として長らく勤務した富山大学の場合、人文学部にヨーロッパ言語コースがあり、フランス言語文化を専門的に学ぶ学生がいる。そして人文学部の専任教員の努力で、毎年現地フランスで語学研修が開催され、オルレアン大学とも大学間交流協定が結ばれた。このようにして地方都市富山でフランス語を学ぶことは、地域の発展と国際化に貢献するという立場を打ち出すことができる。しかしこうした正攻法は、フランス語を専門的に教えられる学科を擁する大学では、時間とコストに見合った効果を期待することもできるかもしれないが、フランス語圏と直接的交流もなく教養科目としてフランス語を教えることが主であるとき、大学のカリキュラムにおいてフランス語は大変不利な状況に置かれる。また国立大学に限らず、専任教員を置かずに非常勤講師だけでフランス語科目が賄われていく傾向が進めば、大学間交流協定や語学研修プログラムのために非常勤講師が時間を割き労力を注ぐことは非現実的であり、大学の特色上必要がないと判断されれば、地方の大学からフランス語科目が消えていく可能性は高くなる。

平成27年度より着任した宮崎大学においては、フランス語圏の大学との国際交流協定はほぼなく[2]、さらに平成28年度から教育文化学部が改組され、フランス語を専門的に学べる言語文化コースの募集が停止される。これはすなわち宮崎大学で専門的にフランス語を学べる機会は失われることを意味する。また平成26年度より工学部、農学部、医学部の学生は、初年度の初修第二外国語科目は半期二単位の選択必修科目となり、第二外国語を週に一回、半期だけ履修すれば足りるカリキュラムとなっている。週一回九十分の授業を十五回、計22.5時間で何を教えたらいいのか、こうした課題に直面する大学は地方においてますます増えていくのではないだろうか。英語教育を最優先し、第二外国語教育が形骸化していけば、いずれ第二外国語のなかからフランス語が消えていくのではないか、地方で長く教えていると切実にこうした危機感を感じる。それゆえ、「地方貢献」型を選びフランス語圏と直接的な結び付きの薄い国立大学、あるいは専任教員も置けない地方の私立大学では､「世界水準」型や「特定分野」型の国立大学、あるいは大都市圏の大規模な私立大学とは別なアプローチでフランス語教育を考えていかなければならないと強く感じている。

3．フランス語学習と地方の活性化

筆者は、平成26年度まで富山大学の一般市民を対象とした公開講座で計８年半の間フランス語講座を担当してきた。いわばフランス語教育を学生教育の立場からだけでなく、地域貢献の立場からも実践し、生涯学習の観点から外国語学習が地域に果たす役割と効果について考えることが多かった[3]。そして様々な実践を通して、フランス語圏と取り立てて深い関係がなくとも、フランス語学習は地域の活性化に十分役立つと実感することになった。すなわち、フランス語学習が果たす地域貢献とは、生涯学習の本質に結びつく「学び」の「継続」のなかに見出されると確信するに至った。それゆえ「地域貢献」型大学においては、単にフランス語圏との関係をうんぬんする以前に、フランス語学習と生涯学習の本質的な関係に注目する必要があると考えている。

いつかフランス旅行に役立てたい、多くの公開講座受講者は受講目的としてこう述べるのだが、社会人にとってそう簡単にたびたび旅行できるわけでない。また仕事の上でフランス語を必要とする方はごくまれである。いうなれば受講者は、一定の受講期間で語学能力を最大限高めたいというよりも、社会人になっても「学び」を続けることで、自分自身を高め自らの生活を豊かにしたいと願う気持ちが強い。この方向性においてフランス語学習はまさに「教養」の名にふさわしいものであり、それはよりよく生きることに役立つと考えられる。そこに生涯学習の根幹に関わる本質のひとつがあるだろう。「地域貢献」型大学が地域に果たす役割のひとつとして、「学習の機会」を提供することが挙げられるが、その観点に照らせばフランス語圏との関連のいかんを問わず地域におけるフランス語学習の意義は失われない。実際、富山大学の公開講座では、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語、ロシア語といった基本的に英語以外の外国語講座が多く開講されていた。こうした第二外国語科目は、多くの人にとって初修であり継続的に学べる点で生涯学習にふさわしい講座である。また特に地方においてフランス語を学べる民間機関は少なく、大学が安価に「学習の機会」を提供する意義は大きい。大都市とその周辺であれば役割分担的に社会人は充実した民間機関を利用できるが、地方においてそうした学習機会は大学が提供する必要性がある。地方において大学の公開講座はフランス語にとって残された大きな鉱脈であると筆者は常々考えてきた。

第二外国語のなかでもフランス語は英語やその他の言語にない特色と魅力を備えている。学生、一般を通じてフランス語学習者の最大の動機は、言語の有用性よりもフランスの文化的側面に対する興味にある。言語はその文化の核をなすものであるが、言語学習であってもフランス語はその言語の背景となる衣食住、芸術文化的要素が言語学習の動機づけに大きく結び付いている。そしてその要素は、職業生活に直接役立たなくとも、学習者の日常生活を豊かにする側面を持っている。例えば、平成27年に六十万部を超えるベストセラーになった『フランス人は10着しか服を持たない～パリで学んだ“暮らしの質”を高める秘訣～』において、アメリカ人著者はフランス留学で学んだ生活文化の知恵を紹介し、その知恵が現代社会においてよりよく生きる手がかりを与えるものだと述べている[4]。この驚異的な販売数は、生活文化の側面において、同じ西欧文化圏でもフランスが英米圏とは別の価値を持ち、その価値が現代日本人にとっても興味を引くことを十分立証するものだ。副題に含まれる「暮らしの質を高める」は、現代においてフランス語フランス文化が与えうる最大の効果といっていいだろう。

公開講座を担当しながら、受講者は語学を効率良く習得したいというよりも語学学習を通して社会人生活で失われがちな「学び」を取り戻し、それを「継続」することで自らの「暮らしの質を高めたい」のだと痛感した。しかも語学学習にとり「継続」はもっとも大切なことであり、かつもっとも難しいことである。一定期間学習して成果が出ても、止めてしまえばその成果の多くが忘れられていく。公開講座では、受講者は学生のように単位取得を迫られることがないので、嫌ならばすぐに止めてしまうし、それぞれ生活のタイムテーブルを持っているので、一般市民を「継続」的に教え続けることは難しい。それゆえ筆者は、受講期間に語学上の学習成果を多く上げるというよりも、学習を「継続」できるように配慮した講義内容と講座運営を心がけてきた。語学学習ばかりでなく、その背景となる文化的要素を多く含め、さらに受講者同士がコミュニケーションを取る機会を多く取り入れた。その結果、ほとんどの受講者が三年以上継続してくださり、中には八年間ずっと継続してくださった方もいた。継続率が上がることで受講者数も増え、毎年度、前期・後期ともに三から四講座を維持し、計五十名程度の受講

者を得てきた。こうした実践を通して、受講者がフランス語学習を「継続」すること自体に、地域社会を活性化する効果があると考えるに至った。言い換えれば、フランス語学習が地域の人々の学びとコミュニケーションの場となり、「暮らしの質を高める」ために役立てられる。語学学習の成果は、地域貢献と生涯学習的観点から考えると、単に個人的語学力の向上にあるばかりでなく、受講者が学習の「継続」を通して地域社会のネットワークを築き、「暮らしの質を高める」ことにあると考えられる[5]。

「地域貢献」型大学の使命が、職業人の排出だけでなく、地域を活性化し地域に貢献していく人材の育成にもあることを認識するならば、この生涯学習的視点を学生教育にも活かす必要があると考えられるだろう。今後仮に国立大学において専門分野としての人文系が縮小されていくとしても、全学的な基礎共通科目において学生の「学習の機会」を保証する科目を充実させていかなければならないだろう。それゆえ、第二外国語科目のなかでも実用性が薄いと思われがちなフランス語は、生涯学習的観点から見つめ直し、特に学習の「継続」という観点を重視していく必要があると考えられる。選択必修期間を越えた学習の継続率こそ、今後フランス語が生き残る最大の指標になるのではないだろうか。

4．教養科目の中のフランス語

駐日フランス大使館文化部が調査した統計では、大学の第二外国語としてフランス語のシェアは十三パーセントである[6]。地理的・経済的観点から中国語が大きく伸び、地方国立大学においてまだまだドイツ語は強く、韓国語やスペイン語が追い上げ、フランス語は低迷するばかりである。それゆえコスト削減のためカリキュラムから削られる優先順位が高まっている。こうした状況において、近年のフランス語教育は、フランス語圏と複言語主義を鮮明に打ち出している[7]。一方において、フランス語は単にフランス共和国の言語でなく、世界に広がるフランス語圏の国際共通語であるという立場に立つ。これは、国際語として英語の有用性に競合することで、言語の有用性の順位を上げようとするものだろう。他方、英語による言語の一元化に対して、EUヨーロッパ連合に倣った複言語主義を標榜することで、フランス語は様々な言語と文化を守る立場を主導する言語となろうとする。筆者もいずれの主張の正当性と必要性を認めるが、今のところ「地方貢献」型大学においてそれを声高に唱えてみても、選択必修科目として第二外国語を履修する学生の耳になかなか届かないだろう。むしろ筆者は、学生教育の場においてもフランス語科目を生涯学習的観点からとらえ直すことが先決であると考えている。

カリキュラムのなかで選択必修期間と時間数が減少していくとき、例えば週一回半期しか選択必修期間が与えられていないとき、その期間と時間数で最大限効果的な語学学習法を考えることはもはや限界を迎えているといっていいだろう。むしろ選択必修期間を越えて学習を「継続」させることを考えなければならないだろう。教養科目の第二外国語は、英語が最優先されるほど、下手をすれば必要単位のためだけにいやいや履修する意識が強まる。学生にとって卒業単位取得のためだけに、関心もなければ実際に使いそうもない語学を勉強させられることほどつらいことはない。またいろいろな言語を身に付ける利点を学生が認識したとしても、そのための学習が大きく負担になるのであれば、必要単位取得を超えて学習を継続することは期待できない。そこで、むしろ学生教育においても生涯学習的観点をより大きく取り入れて、選択必修期間を越えて学習を「継続」できるようにする必要があるのではないだろうか。例えば、

以前、公開講座の受講者のおひとりが、筆者の講座とともにフランス人教員が担当する講座をあわせて受講していたとき、ネイティヴ教員担当の講座では「仕事で忙しくて予習できないとついていけないから来期はもうとらない」とこぼしていらした。また筆者のフランス語を履修した学生が、「友達は別の外国語を履修したが専門科目の一番難しい科目より勉強しなければ試験に通らないから二度とやりたくないといっている」と教えてくれた。教える側からすれば熱心に教えているつもりでも、受講者や学生の側からすれば、仕事や専門科目に差し支えるほどの勉強量を要求されるのでは、たとえ好きでも学習を継続する意志は失われてしまう。こうした点を鑑みても履修期間内に最大限に語学力を上げる教授法と学習の継続を促す教授法は明らかに違うと考えられる。学習の継続を目的とする教授法とは、学生の専門を問わず継続できるよう促すものであり、それは社会人となった後も仕事のいかんを問わず継続できるよう促すものである。学生教育がいずれ生涯学習へと「継続」する観点を含むとき、そこに「地域貢献」型大学におけるフランス語教育の大切な使命のひとつがあると考えられるのではないだろうか。フランス語学習を地域貢献と生涯学習的観点から考える視点が、昨今のフランス語教育論のなかで不足していると感じられる。そして学生教育を生涯学習的観点から見直すとき、様々な点でフランス語学習の内実を変えていかなければならないだろう。特に教授法と評価基準を見直して授業内容を質的に転換していかなければならないだろう。まず教授法に関して言えば、履修期間に効果的に語学力を高める教授法ばかりでなく、語学学習を続ける意欲を持たせる教授法を多く採用する必要がある。また評価基準に関しても、語学知識や運用能力を個人的に評価する評価基準ばかりでなく、より多様な評価基準で学生を評価できるようにする必要がある。

以上のような問題意識において、筆者は一般市民を教える経験から得た教授法を学生教育に活かすことを試みてきた[8]。その結果、学生の継続率とともに履修数を伸ばせる手ごたえを得た。特に富山大学芸術文化学部で五年間フランス語を担当した経験において大きな成果を上げることができた。高岡短期大学が富山大学に統合する形で平成17年に新設された芸術文化学部は、平成21年度まで高岡キャンパスで履修できる第二外国語は中国語のみであった。そこでフランス語も加えることになり、平成22年度より筆者が担当することになった。当初、芸術文化学部のフランス語は半期一単位の選択必修科目（二年後に二単位に変更）で週に二コマ（文法と会話）あり、前期履修者は約六十名だった。この数字はほぼ新入生の半数であり、残りの半数は中国語を履修したことになる。しかし後期の履修者は文法・会話クラスともに二十名を切り、半期選択必修という現実をまざまざと思い知った。また芸術系の学生は面倒な語学学習を敬遠していることがよくわかった。その後、こうした現実を踏まえて、語学学習を「継続」するよう指導していった結果、学生の後期への継続率は高まり、単位数も中国語と同じ二単位に変更されたこともあり、前期の新入生の履修数も伸びていった。筆者が最後に担当した平成26年度において、前期の一年次フランス語の履修者数は99名、120名程度の新入生の内三分の二以上がフランス語を履修し、後期においても文法クラスで八割近く、会話クラスで九割の学生が引き続き履修した。第二外国語科目でフランス語が中国語と競合し、フランス語が履修者数で中国語を圧倒することは現在なかなかないだろう。

またこうした「継続」を意識した教授法の効果は、期末に行われる学生アンケートにもはっきり表れ、学生評価の高さから、筆者は富山大学五福キャンパスで開催された平成25年度教員研修会において授業の実践例を発表し[9]、さらに高岡キャンパスにおいても平成26年度 FD 月

間の公開授業科目に選ばれ授業を公開した。フランス語教育の現状を考えるとき、少数精鋭的な発想で専門的かつ実践的に語学を習得させる教授法は、「世界水準」型や「特定分野」型の国立大学においては有効でも、「地域貢献」型大学の教養科目には向かないのではないだろうか。筆者は、どの学部の学生であろうとフランス語を第二外国語として選択したとき、選択必修期間を越えてフランス語学習を「継続」させていくことが必要であると考えている。

5．SNS社会と語学教育の可能性

それではどうしたら語学学習を学習者に「継続」させることができるのか、その方策は様々であり、まずは興味深い授業内容にすることはもちろんだが[10]、その中でもクラス内のコミュニケーションを活発にすることは「継続」のために非常に有効である。現在、大学教育のなかで、学生のコミュニケーション能力の育成がひとつのキーワードとして挙げられる。言語教育はその根底に他者とのコミュニケーション能力を養う意図があることはいうまでもない。英語が第一外国語として日本語話者ではない人々とのコミュニケーション手段を学ぶ科目として最優先されるとき、フランス語がただ単にフランス語話者とのコミュニケーション手段を学ぶことを目的としたのでは、中国語などと比較してはなはだ不利である。そこで生涯学習的な発想の転換が必要になってくる。すなわち、フランス語学習を通じて、地域の人々同士がコミュニケーションし、人間的ネットワークを築き、自らの属する地域生活を潤いある豊かなものにしていくように、学生がフランス語学習を通じて、クラスメイトとコミュニケーションし、人間的ネットワークを広げ、自らの所属する大学生活を潤い豊かなものにしていく、そのようにクラスを機能させるのである。日本語話者同士でさえ日本語で日々コミュニケーションしながら、コミュニケーションに困難を覚えているのが現代という時代の特色である。最優先されるがゆえに評価の優劣が学生にとって深刻な英語よりも、ほとんどの日本語話者にとって初修となる外国語を通してこそ、仲間と共通の課題を共有しコミュニケーションすることで自らの居場所を確認し、その結果、言語学習を「継続」しようという意欲につながると考えられる。

学習の「継続」のために、学習者同士のコミュニケーションが大切であるとき、そのコミュニケーションは学習の「共有」という形で考えられる。フランス語学習をフランス語話者とのコミュニケーション手段を学ぶ場として考える限り、ネイティヴ教員の授業や語学研修、留学といった方向に向かわざるを得ない。しかも実際にそのために役立つ成果を上げるにはかなりな時間数が必要になる。週一回、半期の授業でそれを行う努力をしても、授業内容が文法事項の習熟に傾けば学生に敬遠されるだけであろう。むしろ共通の課題を分かち合う他者とのコミュニケーションの場ととらえ、フランス語学習を互いに「共有」しその成果を互いに「発信」する方向性を打ち出す必要性があると考えられる。

非常勤講師としてフランス語を教えていたとき、大学も学部も異なる様々な学生を担当し、さらに公開講座において一般市民も担当してきた。語学の授業は基本的にクラス単位で、たとえ同じ内容を教わるとしても、別のクラスの学習者の顔を知ることはない。フランス語学習を個人的な知識の習得、あるいはフランス語話者とのコミュニケーション手段の習得と考える限り、クラスを越えた語学学習の「共有」という視点は生まれてこない。しかし学習者同士で学習の「共有」を目指すならば、クラス内において「共有」するばかりでなく、別のクラスの人々とも「共有」できるのではないかと考えられる。そのとき、ひとつのクラスの学習を別のクラ

スに「発信」するという観点が生まれてくる。閉ざされたクラスが開かれたクラスへと変化し、学習者間の広がりあるコミュニケーションが学習の活発化を促進し継続に役立つのではないかと考えられるだろう。しかし別々のクラスの学習者をひとつのクラスに集めることはカリキュラム上不可能であり、また大人数で語学クラスを運営することも欠点が多い。ところで、インターネットが可能にしたSNS（Social Networking Service）は場所と時間にとらわれないコミュニケーション形態を特徴として急速に発展した。「共有」と「発信」、これはまさにインターネット上でSNSが発達した現代社会のコミュニケーションのあり方を表すキーワードと言えるものである。このSNS的な方法論をフランス語学習にも取り入れることで、学習の「共有」と「発信」が可能になるのではないか。こうした観点から筆者は、動画サイトYoutubeに自らのアカウントを作り[11]、それを通じて受け持ちの全クラス間で学習を互いに「共有」し「発信」する試みを行っている。

筆者は、必ず授業の始めにフランス語の曲を歌うことにしている。これは何度もフランス語の音を耳で聴いて自ら口にしてみるという語学的効果もさることながら、授業に入っていく心構えを作ることにもつながる。たとえ歌詞のフランス語が理解できなくても、カナを振っておけば授業の初日から歌い始めることができ、覚えた歌は学習成果として学生の記憶に残る。何よりカラオケ文化を発明した日本人にとって歌うことは楽しいことなのだ。そしてクラス内で習った歌を、学科ごとあるいはグループごとに発表する機会も必ず設けている。これはいわばクラス内においてグループごとに学習成果を「発信」し他のクラスメイトと「共有」する効果を生む。また特に新入生の場合、クラスメイトと知り合いコミュニケーションする良い機会となり、学生生活に溶け込みやすくなる効果がある。さらに、このグループごとの発表を中間あるいは期末の試験課題に取り入れ、どのグループが優れているか学生自身に投票で決めてもらい、その結果を成績の評価につなげるようにしている。もちろん語学の知識を問うペーパーテストを小テストの形で行い、その結果を成績評価のベースに用いることは不可欠だが、評価基準の一部分を学生自身に委ねることで、語学学習の成果が個々の語学力ではかられるばかりでなく、他者とのコミュニケーションのなかでもはかられるようになる。いうなればチームワークやプレゼンテーションといったコミュニケーション力を評価基準に適応できるようになる。平成26年度前期は受け持ちの全クラスにおいて、ちょうど大ヒットしていた映画『アナと雪の女王』の主題歌「Let It Go」をフランス語ヴァージョンで歌った。これはタイムリーな曲だけに学生一般を問わず好評であった。さらにSNS的方法論をフランス語学習に活かす試みを行った。すなわち学生が歌う様子を動画として記録し、受け持ちの全クラスで見せ合うことにした。ひとつのクラスの学習成果を他のクラスに「発信」し「共有」する試みである。実際、学習者にとって別クラスの人の姿を見ることはとても興味深いことである。そして別クラスの学生が一生懸命に歌っている姿を見ると、見ているクラスの学生のモチヴェーションが確実に上がる。他のクラスが楽しそうにやっているなら自分たちもやってみよう、という気になるのだ。

さらに一番好評を博した富山大学理学部物理学科の一年生が歌う動画をYoutubeの自らのアカウントにおいて公開した[12]。そうすることでいわば理論的上、全世界に学習成果を「発信」し全世界の人と「共有」することが可能になる。視聴していただければわかるようにフランス語の発音は良くない。しかしこうした学習成果はたとえ不完全であっても十分楽しめる。単にフランス語話者と言葉が通じる通じないとは別次元において、学習の成果を、学習に参加している人ばかりか参加していない人にも「発信」し「共有」してもらえる。この動画は、一年経っ

た現在三千以上の再生回数を挙げ、日本語ばかりかフランス語でもコメントが入っている。クラス内で「共有」した学習成果に対して見知らぬ誰かまで反応してくれることは、学習者にとって良い刺激となる。SNSを利用した方法を授業に導入することにより、手軽に授業内容とその成果を国際的に「発信」し「共有」できる手ごたえを感じた。学習者間のコミュニケーションの輪がクラス内からクラス外に広がり、グローバルなコミュニケーションにつながっていくことを実感できた。授業内容の一般公開というと、テレビ講座や放送大学、あるいはインターネットにおいて講義を配信することがまず考えられるが、そうした映像は関心のある学習者にとっては有効でも一方的になりやすい。マイケル・サンデル教授のような授業風景を記録したものは一般視聴者にも興味深いものであるが、スター性のある先生の名講義を拝聴する側面が強く出てしまう。筆者はむしろ学習の成果を動画にすることで、学習者を主役にしたいと考えている。

6.「ミシェル・ポルナレフ『シェリーに口づけ』動画コンクール」

そこでSNSの利用法をさらに発展させ、学習者間のコミュニケーションの輪を学生から地域、そしてグローバルに広げ、学習の活発化と「継続」を促すため、平成26年度に、富山大学芸術文化学部のフランス語履修者と、富山大学公開講座フランス語受講者が協力する形で、「ミシェル・ポルナレフ『シェリーに口づけ』動画コンクール」を開催した。

この企画を思いついた経緯は以下のようであった。前述の通り、筆者は授業において毎回フランス語の曲を歌っているが、フレンチ・ポップスの代表曲、ミシェル・ポルナフ「シェリーに口づけ（Tout, tout pour ma chérie）」は必ず歌う曲の一曲である。1971年に日本でヒットした古い曲ではあるが、その後何度もCMなどに用いられ若い世代の学生でもどこかで耳にしたことがあり、また明るく心弾むメロディーは世代を越えて聴き手を元気づけてくれる名曲である。蛇足ながら付け加えておけば、ミシェル・ポルナレフ（Michel Polnareff, 1947- ）は、フランスを代表する歌手のひとりで、今も根強い人気を誇る。フランスを離れ長らくアメリカ合衆国のロサンゼルスに住むが、2007年には34年振りにフランス本国においてコンサートツアーを開催し熱狂的に迎えられた。この曲をクラスにおいて紹介するとき決まって見せる映像がYoutubeに公開されている。詳しいことは不明だが、1979年にミシェル・ポルナレフが来日した際にテレビ出演した映像（「ミュージックフェア」南田洋子司会）で、ピアノを前に光沢のある緑のスーツ姿のポルナレフが、セーラー服姿の日本のバックダンサーたちと一緒に「シェリーに口づけ」を歌っているものである[13]。ポルナレフの姿もインパクトを与えるものだが、それ以上にポルナレフのバックで歌って踊る日本の女の子たちがとても印象的で、特に曲の間奏でダンサーが踊る振り付けは今見るととても可笑しい。学生にとっては、アイドル文化の源流を見る思いだろう。

一方、近年ポピュラー曲のPV（promotion video）にさまざまな映像をつけ、地元をアピールする企画が世界的にブームであった。ファレル・ウィリアムス（Pharrell Williams, 1973- ）の「Happy」はその代表曲であり、日本においてもAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」に関して、曲のプロモーションと地元PRを兼ねたさまざまなPVが制作公開され、地方活性化の一方法にまで応用されていた[14]。またフランスにおいても、－M－（Matthieu Chedid）が自身の曲「Mojo」のPVを模倣した動画を一般から募集する企画があり[15]、子供たちが出演した動画が最

優秀動画に選ばれ、－M－のコンサートにその子供たちが招待された[16]。さらに一般人（Damien Straker）がYoutube上に投稿した「シェリーに口づけ」の動画を、ミシェル・ポルナレフ自身が評価したというフランスのテレビニュースを見かけた[17]。

そこで学生がフランス語で「シェリーに口づけ」を歌った音源に、上記のテレビ映像を参考にしたオリジナル映像を付けて動画を作成してもらい、コンクールを開催してみてはどうかと考えた。原曲をそのまま音源に使用して動画を作るのが一般的だが、それでは語学学習の成果の発表にならないので、たとえ下手でも学生自身が歌った音源を使用する必要がある。動画作成は、今や一般の学生でも簡単にできるが、芸術系の学生にとって自らの作品を発表する良い機会であり、学部の特性にあったものだと考えられた。学生に対しては、この企画を前期授業で提示し後期授業に取り入れることで、前期から後期へと語学学習を「継続」させる興味づけに利用しようとした。また公開講座の受講者のみなさんに対しては、このコンクールをバックアップするための支援を仰ぐことで、語学学習の興味づけに用いると同時に、地域の活性化に役立てたいと考えた。さらに動画をYoutube上において公開し、学習成果と地域振興をグローバルに「発信」しようと考えた。ただし筆者は非常勤講師であったので、あくまで大学の事業とは無関係な個人的企画とした。それゆえ、この企画を後期の授業内容に取り入れはしても、学生には成績や評価に関連しないこと、公開講座の受講者には公開講座と無関係な自由参加であることを忘れずに明言し確認した。

前期授業において参加チームを募集し、夏休みに制作、後期の授業において公開するという日程を組んだ結果、四チーム（一年生三チーム、二年生一チーム）計21名の学生が参加を希望してくれた。また公開講座の受講者に対しても前期講座においてサポートメンバーを募り、33名の賛同者を得て「ミシェル・ポルナレフ『シェリーに口づけ』動画コンクール」後援会を立ち上げた。そして後援会会員の善意により懸賞用に六万四千円が集まった。多くの受講者から協力が得られたのも、長年にわたり公開講座を受講してくださった方々と筆者の信頼関係に基づくものであり、その意味でも学習の「継続」が生みだした成果だと考えられた。学習の「継続」とは、教わる側から教える側への信頼のしるしでもあるだろう。企画説明時に、筆者は動画をYoutubeに公開して「ミシェル・ポルナレフ本人から反応が欲しい」といささか風呂敷を広げたところ、みなさん笑って真に受けていらっしゃらない様子であった。

四チーム（「まさしファンクラブ」「GEIBUNS」「チームカワウソ」「ファンタスティック４」）が作成した動画はYoutubeの筆者のアカウントにおいて公開されているのでご覧いただきたい[18]。十月に提出された動画を初めて見たとき、大学一年生でも今の学生はここまでできるのかと、その完成度の高さに驚かされた。芸術系の学生だけあり編集技術ばかりでなく若い感性が非常に生かされていたからである。前期授業においてこの曲をクラス内で歌って練習していなかったため、フランス語の発音の点ではやはり物足りなかったが、半期の学習成果と彼らの専門をつなげる試みは失敗ではないと感じられた。そして四つの動画をYoutubeにおいて公開したところ予想を超える展開となった。朝に公開した「まさしファンクラブ」の動画が、夕方から再生回数が一気に千回を上回り、不思議に思っていたところ参加学生のひとりが理由を突き止めてくれた。その動画がすでにミシェル・ポルナレフ公式Facebookとtwitterにおいて「共有」されていたのである[19]。そもそもは一ファンが動画を発見し「共有」した結果、ポルナレフ自身も気付いて「共有」してくれたようで、しかもFacebook上において好意的なコメントまで書き込んでくれていた。SNS上でよくあることであり、こうした展開となることを願ってはい

たものの、実際にそうなるとかなりな驚きと感動を覚えた。四つの動画の内、三つの動画（「まさしファンクラブ」「GEIBUNS」「チームカワウソ」）が公式Facebookで「共有」された結果、各動画に多数の「いいね」とともにフランス語で様々なコメントが書き込まれた。「ファンタスティック４」だけもれた理由は不明だが、同性愛的内容だからというよりも別の歌手（前出のDamien Straker）のPV[20]をパロディ化したものだったからではないかと推測される。

左からミシェル・ポルナレフ公式Facebookにシェアされた「まさしファンクラブ」、「GEIBUNS」、「チームカワウソ」の動画。「まさしファンクラブ」の冒頭にポルナレフ自身のコメント「ブラボー、ファンのみなさん！」とある。

後期授業の第一回目に受け持ちの全クラスで四作品を視聴してもらい、順位とコメント付で投票してもらった。すなわち芸術文化学部の受け持ち四クラスばかりでなく、富山大学共通教育科目クラス（経済・理工学部対象）、石川県金沢市にある北陸学院大学フランス語クラス、そして富山大学公開講座の三クラス、学生と一般を合わせ計210名が投票に参加し、みな作品の仕上がりに驚き、そして笑いながら楽しんで観てくれた。無記名で書かれた投票用紙のコメントを読むと、この企画を通じて、クラスの垣根を越えて富山や金沢でフランス語を学習する人々のコミュニケーションの輪が形成されていると実感された。例えば、異なった大学で見せた結果、視聴したある学生は動画上に小学校時代の同級生を発見して驚き、後でFacebookを通じて連絡を取り合った。また何人もの学生がこの四つの動画を自らのtwitter上で「共有」し、さらに富山大学芸術文化学部Facebookにおいても学生活動のひとつとして「共有」してもらえた。投票の結果、優勝は奇しくも唯一ミシェル・ポルナレフ公式Facebookにおいて「共有」されなかった「ファンタスティック４」に輝いた。

ミシェル・ポルナレフ公式Facebook上においてフランス語圏の人々がフランス語で書き込んだ様々なコメントを授業内で紹介できたことは、学生にとっても一般人にとっても自らが参加するフランス語学習がグローバルに「発信」され「共有」された結果を実感できるまたとない機会となった。参加チームの代表が、Facebookとtwitterを使い、ミシェル・ポルナレフご自身にお礼を伝えたところ、ご本人から返信が届いた。ミシェル・ポルナレフ自身、日本で自分の曲

が今でも愛されていることを実感したのだと思われる。拙いフランス語で歌われていても、作詞作曲者の心に届いたならばその学習成果は素晴らしいものではないだろうか。芸術系の学生にとって、フランス語圏の人々に自らの作品を「発信」し、それ対して300から600を越える「いいね」が押され様々な人からコメントをもらえたことは、大きな自信につながったと思われる。地方にいながらにして自分の活躍の場は国際的に広がっていると実感できただろう。こうした試みもまたグローバル人材の育成につながるのではないだろうか。

コンクール自体はこれで終了したが、さらにもうひとつの企画を付け加えた。富山大学公開講座フランス語では、十一月の第三土曜日にボジョレー・ヌーボー解禁に因み、全クラス合同で「ボジョレー・ヌーボーパーティー」を毎年自主的に開催してきた。異なるクラスで学ぶ受講者が年に一度集まり、互いに顔を合わせ知り合う機会を設け、地域住民のコミュニケーションを活発化する目的で始められたが、毎年四十名前後の参加者を得て好評を博していた。パーティー自体地域に密着した手作りなもので、参加者がそれぞれ食べ物を持ちより、ワインは受講者の酒店から購入し、お菓子も受講者のお菓子店にお願いしていた。またその機会を、筆者の授業を履修する富山大学生と一般市民の交流の場としても活用していたが、平成26年度は、富山大学芸術文化学部の吹奏楽サークルにミニコンサートをお願いした。そして吹奏楽の演奏に合わせて、コンクール優勝チームである「ファンタスティック４」のメンバー二人と受講者全員で「シェリーに口づけ」を歌った。筆者がその様子を携帯電話で撮影してYoutubeに投稿した結果[21]、この動画もまたミシェル・ポルナレフ公式Facebookとtwitterにおいてポルナレフ自身のコメントとともに「共有」してもらえ、Facebook上で6200近い「いいね」、250近いコメント、700近い「共有」を獲得することになった。受講者自身、自分が映る動画がフランス語圏において反響を得たことで、フランス語学習の成果を驚きと興奮をもって実感できた。Facebookに登録している受講者の中には、ミシェル・ポルナレフ公式Facebookにコメントを残した方もいらした。

ミシェル・ポルナレフ公式**Facebook**がシェアした「ボジョレー・ヌーボーパーティー」の動画。冒頭にポルナレフ自身のコメント「ありがとう、ファンのみなさん!!!　私も日本のみなさんを忘れていません！」とある。

Youtubeのアカウント所有者には、動画が再生された地域を国別で知ることができる。2015年９月22日現在の再生回数と上位の国別再生比率を記しておく。「まさしファンクラブ」（再生回数2716、日本50％、フランス41％、ベルギー3.5％）、「GEIBUNS」（再生回数1702、日本67％、フランス25％、ベルギー2.8％）、「チームカワウソ」（再生回数1569、日本46％、フランス43％、ベルギー4.3％）、「ファンタスティック４」（再生回数1537、日本92％、フランス4.7％）、「ボジョレー・ヌーボーパーティー」（再生回数6184、フランス78％、日本11％、ベルギー3.8％）であり、このようにフランス語を題材にするとき、やはり自国ばかりでなくフランス語圏に向けて「発信」されることがわかる。フランス語を使えば、自らの地域がとたんにフランス語圏の一部となるのである。

7．動画コンクールの成果と反省点

この動画コンクールは、SNSを利用してフランス語学習を「共有」「発信」し、学部や大学、学生と一般市民という壁を取り払い、地域の活性化とグローバル化を実現できた企画となった。現地に赴かなくとも、ネイティヴ教員に教わらなくても、少ない学習でも、まだまだアイデア次第でフランス語学習を面白くできるんじゃないか、そういう自信をもたらしてくれた。確かに筆者は、自らの五年間に及んだフランス留学を通じて日本にいては得られない多くのことを経験した。しかし今回の企画を通じて、フランス留学では得られなかった経験をしたのも確かである。

そのもっとも大きな成果は、フランス語学習を「発信」し相互的に「共有」することで、地元に密着する形でコミュニケーションの輪をクラスから地域に広め、それがフランス語圏にまで広げることができたことである。また手軽な方法で、フランス語学習そのものを、地方からグローバルにつなげるひとつの道筋を見つけることができたことである。さらに習いたての語学学習の成果であっても、それを「発信」していくことの大切さを感じさせられた。たった半期習っただけで何になる、少ない時間数、薄っぺらい教科書を嘆いていても未来にはつながらない。大枠の制度が不利な時代だからこそ内容と実質を転換していかなければならないだろう。ミシェル・ポルナレフご本人から「Mersea」（Merciのポルナレフ的綴り）と反応してもらえたことは感動的であった。「まさしファンクラブ」の動画は、爽やかな原曲をホラーに仕立て、サビで曲のテンポを遅くするという大胆な解釈を行い、フランス語圏のファンから賛否両論なコメントが書き込まれた。しかしポルナレフ自身が好意的に擁護するコメントを書き込んでくれたとき[22]、言葉の上手い下手を超えて心が伝わったのだと感じられた。アーティスト自身が評価し、フランス語圏の人々から多くの反応が得られたことで、語学学習の成果とは単に知識の習得ではないことが証明された。気持ちを伝える言葉の大切さを改めて確認させてくれた。

成果と同時に反省点もある。この企画がたった一回で終わったことは大変惜しまれる。この成果をきっかけにこうしたコンクールを毎年開催しもっと大きく広げていきたいと考えていたが、残念ながら筆者が宮崎大学に赴任した結果、一度切りに終わってしまった。筆者が非常勤講師であり、個人的なプロジェクトに留まらざるを得なかったため、企画の継続という面で後任を見つけることは大変難しかった。また大学のカリキュラムを活用しながら、個人的なプロジェクトを推進することは、悪くすれば公私混同という非難を招く恐れがあるので、企画を継続させていくためには大学側などと話し合う必要性も出てきただろう。またこの企画は語学学習の成果を取り入れるものであったが、動画の作成前に歌詞の発音などの指導を行わなかったため、作成したチームの発音には問題が残った。授業で一定期間歌った曲を課題にしたほうが良かったと思われるし、作成時に指導する機会を設けた方が良かったかもしれない。

この企画を通して得た経験を現在宮崎大学の授業において活かしているが、その成果に関しては今後報告したいと考えている。

8．おわりに

大学改革が推し進められるなかでフランス語教育も変化していかざるを得ない。まずは教養科目としてのフランス語科目をもっと学生にとって関心の持てる授業内容にしていかなければ

ならないだろう。そうでなければ、フランス語は専門科目として生き延びることができても、教養科目として生き残ることはできないと考えられる。関心のある少数の学生に専門的に教えられる場があればそれでいいと考えたとき、フランス語学習は閉ざされたものとなってしまう。特に「地域貢献型」大学においては、フランス語学習を生涯学習的観点から見直し、選択必修期間を越えた学習の継続率を上げることで、フランス語の存在理由を示すことが大切だと考えられる。

平成26年度に学生と一般市民が協力して開催した「ミシェル・ポルナレフ『シェリーに口づけ』動画コンクール」は、大学教育と生涯学習をつなげ、同じフランス語学習者として学習を「共有」し「発信」する可能性を開いてくれた。そしてSNSを活用すれば、手軽にその成果をグローバルに「発信」し「共有」できる大きな可能性を実感させてくれた。もちろん大学間協定や語学研修、留学といった制度的枠組みを作ることも必要であるが、そうした枠組みがなくとも様々なアプローチで地域の活性化とグローバル人材の育成は可能になると考えられる。ひとつひとつのクラスが繋がり、学習者ひとりひとりの顔が明確になる先に地域と世界が見えてくると考えられる。

注

[1] フランス語教育の現状に関しては「フランス語教育実情調査報告書」（作成 日本フランス語フランス文学会 白山恵一・日本フランス語教育学会 北山研二）http://www.sjllf.org/iinnkai/?action=common_download_main&upload_id=161を参照した。

[2] ベルギーのフランス語圏にあるリエージュ大学と宮崎大学産業動物リサーチセンターの交流協定があるのみ。（2016年よりリエージュ大学とは大学間交流協定に格上げされる。）

[3] 清水まさ志「生涯学習のなかのフランス語教育―ひとつの実践報告―」、『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』第13巻、富山大学地域連携推進機構生涯学習部門、2011年３月発行、15-22頁を参照されたい。

[4] ジェニファー・L・スコット著（神崎朗子訳）『フランス人は10着しか服をもたない～パリで学んだ“暮らしの質”を高める秘訣～』、大和書房、2014年。

[5] 仲嶺政光「大学開放に関する意識調査－富山大学公開講座・公開授業受講者を対象として－」、『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』第16巻、富山大学地域連携推進機構生涯学習部門、2014年６月発行、60-61頁を参照。アンケート結果において公開講座受講者が人間的つながりを求めていることが読み取られる。

[6] Sachiko KOMATSU : « Revaloriser l' enseignement du français au Japon », *Enjeux et perspectives de l'enseignement du français en Asie Actes du premier colloque international conjoint de la SCELLF et de la SJDF*, Société Coréenne d'Enseignement de Langue et Littérature Françaises Société Japonaise de Didactique du Français, Daehaksa, 2014, p.46.

[7] 大木充・西山教行編『マルチ言語宣言－なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』、京都大学学術出版局、2011年、を参照した。

[8] 清水まさ志「生涯学習と第二外国語教育―第二外国語教育の質的転換を目指して―」、『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』第16巻、富山大学地域連携推進機構生涯学習部門、2014年６月発行、５－９頁を参照されたい。

[9] 『第16回富山大学五福キャンパス教養教育教員研修会報告書』、富山大学五福キャンパス教養教育FD専門委員会・富山大学五福キャンパス教養教育院、2014年１月発行、23-32頁を参照されたい。

[10]清水まさ志「教養科目フランス語の課題と方向性」、『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第５号、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部、2013年３月発行、291-302頁を参照されたい。

[11]アカウント名masashi shimizu（https://www.youtube.com/channel/UCihajdz5AJA-8SyjIUOKc1g）

[12]「フランス語で歌ってみた（Karaoké）「アナと雪の女王Let It Go（Libérée, Délivrée）」富山大学理学部物理学科ver.」https://www.youtube.com/watch?v=GmkmLKEVVXg

[13]「Michel Polnareff -“Tout Tout Pour Ma Chérie”（Japanese TV, 1979）」と題された動画。

[14]一例を挙げれば「恋するフォーチュンクッキー 富山県 Ver./AKB48［公式］」https://www.youtube.com/watch?v=-oG4uW_iqmw&index=33&list=PLoyMggLyFh8FVUp3nqGFUC7JmTkvu2N5c

[15]「-M- Concours MOJO」https://www.youtube.com/watch?v=_3s8DIS39f4

[16]「LE MOJO」https://www.youtube.com/watch?v=Pb9I7ncHe6I

「MINIS MOJO AU TRIANON - MATTHIEU CHEDID - 29 MARS 13」https://www.youtube.com/watch?v=JEn3rz10e9k

[17]「Damien Straker - Journal France 3」https://www.youtube.com/watch?v=MhulLPh0FR0

[18]「ミシェル・ポルナレフに捧ぐ（En hommage à Michel Polnareff）「シェリーにくちづけ（Tout, tout pour ma chérie）」 Masashi fan club」https://www.youtube.com/watch?v=zNWkdbR_0dA

「ミシェル・ポルナレフに捧ぐ（En hommage à Michel Polnareff）「シェリーにくちづけ（Tout, tout pour ma chérie）」ver.GEIBUNS」https://www.youtube.com/watch?v=LH6jjMbTDhk

「ミシェル・ポルナレフに捧ぐ（En hommage à Michel Polnareff）「シェリーにくちづけ（Tout, tout pour ma chérie）」ver.Fantastic 4」https://www.youtube.com/watch?v=orjCP8kcT1Q

「ミシェル・ポルナレフに捧ぐ（En hommage à Michel Polnareff）「シェリーにくちづけ（Tout, tout pour ma chérie）」ver.KAWAUSO」https://www.youtube.com/watch?v=0pt2L382cro

[19]https://www.facebook.com/michelpolnareff.officiel　https://twitter.com/michelpolnareff

[20]「Damien Straker-Tout, Tout Pour Ma Chérie-Clip Officiel［Polnaclassiques］」https: //www. youtube. com/watch?v=wkKCIB3wcTg

[21]「Merci à Michel Polnareff “Tout, tout pour ma chérie”」https://www.youtube.com/watch?v=19LPIUiMdT8

[22]«Ça ne prétend pas, j’ai trouvé touchante cette reconnaissance et je trouve la plupart de vos propos déplacés et irrespectueux pour eux et pour moi.»（あれはわざとではない、私はこうした謝意が感動的だと思ったし、あなた方の書き込みは場違いで、彼女たちに対しても私に対しても敬意を欠いていると思う。）2014年10月19日 8:28の記事。